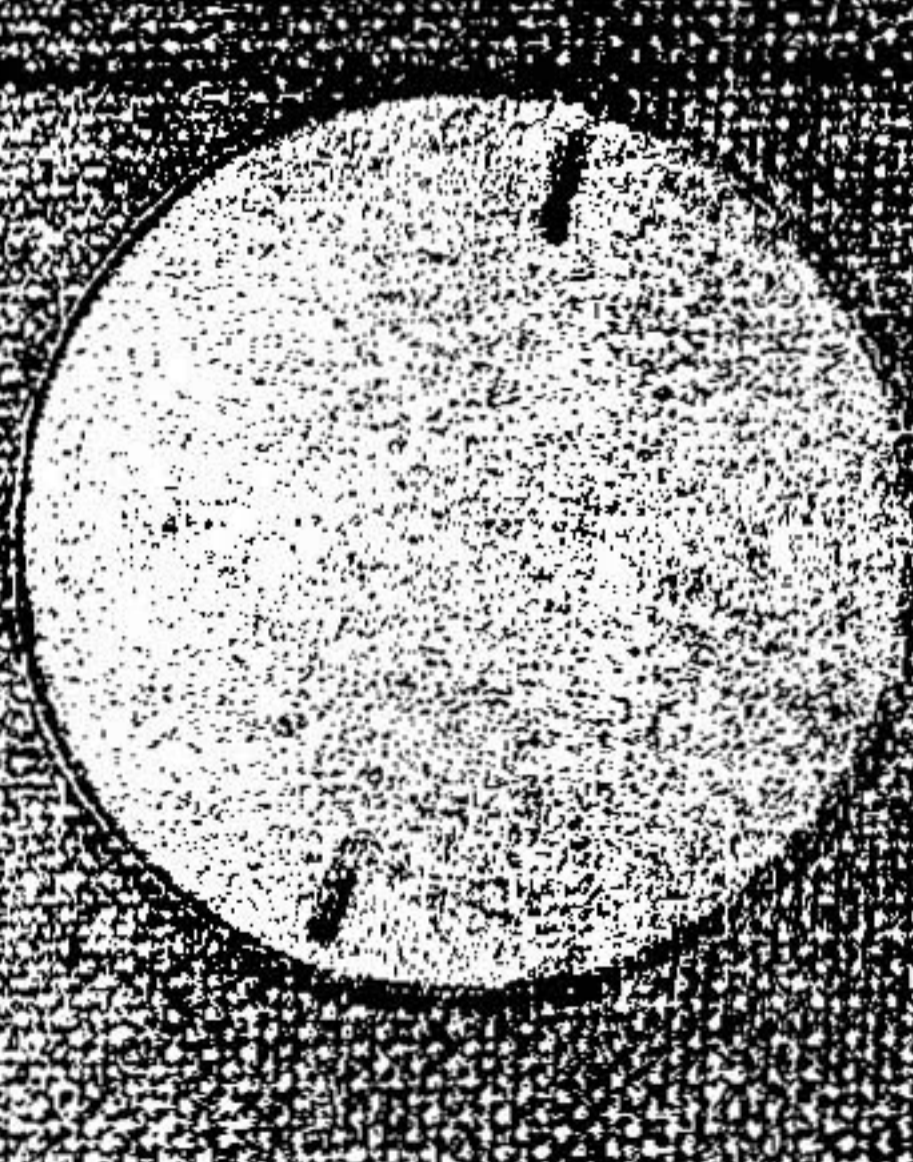


Vertical text, likely a title or chapter heading, written in a traditional style.



216.2
シ

たらなかった。戦局の最終段階では食糧は全く底をつき、府では野生植物の茎葉部や野生小動物の食糧化など、「未利用資源」の開拓を真剣に検討せねばならなかった。お茶はビタミン豊富で強心作用を持つので、これを食べようといったアイディア集が、一日わずかに二ページの新聞（新聞夕刊は昭和一九年三月より一斉に廃止）に掲載される。

使いふるしの布などの諸物資の再利用は、主婦の才覚の発揮されるところである。京都市物資更生協会なるものも生まれ、今日の「ゴミ戦争」など信じられない時代であった。百貨店には雑貨・日用品の修理所が開設された。ガソリン不足は決定的で、流しタクシーなど昔の逸話で、ハイヤーを雇おうと思えば三〇分につき五円という法外な料金を支払わなければならない。街を走る数少ない自動車は、軍や官公庁の専用か、代燃車しか見かけない。液体燃料確保のため松根油の増産等を企てるが、結局開発しきれぬうちに敗戦を迎えるのである。京都—大阪間の物資輸送のため再び往時の伏見港が脚光を浴び、伏見港改修にとりかかるのもこの頃のことであった。

京都は非戦災都市といわれてきたが、決して空襲が皆無であったわけではない。昭和二〇年（一九四五）一月一六日午後一時すぎ、東山区馬町一帯が爆撃され、三四名の死者と四五戸の家屋の全半壊をもたらし始めたのを始めとして、市内では終戦までに六回の空襲が記録され、このほか、五月二八日と六月二日には上京・下京・中京・左京・東山区内に「アメリカの声」「マリアナ時報」など約三〇万枚の宣伝ビラがまかされている。

このため、京都市でも防空対策はさしせまった課題となった。市民には半国防服を着て就寝すること、天井板は二、三枚はずして焼夷弾が落されてもすぐ除去・消火作業ができるようにすること、など細かな指示を与える一方、昭和二〇年三月には、京都市戦時災害



NO.4 戦争がきびしくなると、本土決戦にそなえて様々な対策がたてられたが、写真はモンペ・防空ずきんの婦人達が、バケツリレーの防火訓練をしているところ。

救助本部を設置する。防空服を着用せずには外出しないよう指導して、ふだん着のまま交通機関を利用することはできなくなった。四月には府社寺課は、東山一帯の社寺有林を横穴の坑木や防空壕の資材のため一部伐採することを認可した。市役所行政も一九〇万円の予算で防空壕に移転を計画し、蹴上の都ホテル横、蛇ヶ谷の絵画専門学校横に大規模な防空壕の建設を計画した。島津製作所・寺内製作所・寿重工業・日本電池など防空法指定工場には重点的な処置がとられていく。

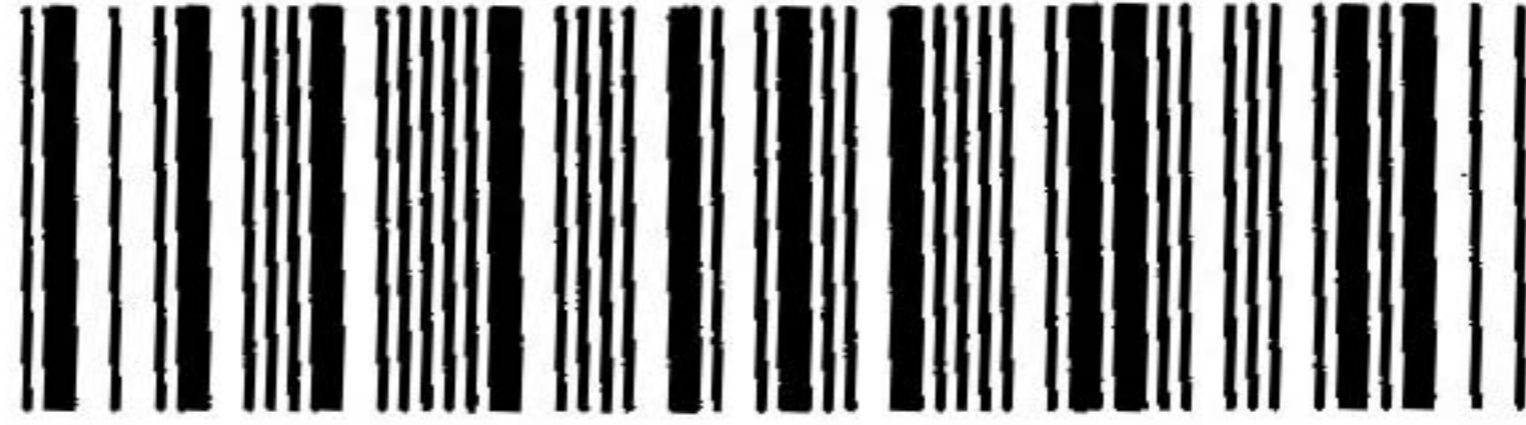
中でも昭和二〇年になって本格化する都市疎開^a建築物撤去は、小空地・消防道路等の建設を目的に、四次にわたり三六八カ所、七〇万坪に及んだ。ちなみに今日、市内の幹線道路たる堀川通・御池通・五条通は、この建物疎開のさいの空地を利用して戦後拡張工事がなされたものである。^a

また、鉄筋コンクリート製の建物の利用統制によって、これら堅牢建物は、行政指導による諸利用がはかられていくことになった。例えば百貨店の一面は、統制会社事務所・行政事務の受付・日用品修理所などが「店開き」する光景を呈することになる。京都御所も昭和二〇年六月、主要な殿舎のみを残して渡廊下・御台所など約五、〇〇〇平方メートルが疎開・撤去された。

このような状況では、もとより教育や文化行事は望むべくもない。昭和二〇年には葵祭も祇園祭も行列は中止せられ、わずかに顔見世のみが休みなく続けられたにすぎない。今宮のやすらい祭は、本来疫病除けの神事だが、その赤熊しゃぐまをふりかざした疫病神を「洋鬼」^a鬼畜米英にみたてて、戦意昂揚キャンペーンの場となっている。昭和一九年三月より実施された高級遊楽場の休業処置要綱も終戦まで継続され、嵐山の屋形船は洛南地区で肥料

a・『京都の都市計画』

京都市右京中央図書館



331078252

04032013

M747AB3